三好達治全集

4

三好達治全集

4

筑摩書房

三好達治全集第四卷
昭和四十年八月三十日發行
著者　三好達治
發行者　古田晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所　筑摩書房
電話東京(291)七六五一(代表)
振替東京四一二三
印刷　株式會社精興社
製本　株式會社鈴木製本所
© T. Miyoshi

三好達治全集第四卷目次

詩に就て

現代俳句の詩的價値……一二
一家言……二三
現代詩の難點……二八
現代詩は難しいか……三二
詩歌と科學……三九
俳句と季題……四七
俳句の抒情性……五三
時評詩歌……五八
ニュースの詩的感興……六三
新秋雜記……六八
ある魂の徑路……七五
言葉、言葉、言葉……八一
推敲鍛錬……八九
詩歌の朗讀に就て……九三
國民詩に就て……一〇二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

國民詩雜感……一一一
初夏雜感……一一四
燈下言……一一七
燈下言……一二二
マチネ・ポエテイクの試作に就て……一三〇
美しいもの……一四一
詩語の彷徨……一四七
現代詩に於ける「俳句」と「短歌」……一六〇
今年の詩壇……一七一
「兒童詩」雜感……一七六
偶言……一八四
好尚……一八六
雜感……一八八
文學の魅惑……一九一
歌ひきるといふこと……一九九
現代詩について……二〇五

芥川龍之介の詩歌……二〇八
蕪村句の小に就て……二二三
不定見……二四二
短歌と私……二四五

詩人に就て

ポール・ヴェルレーヌに就て……二五九
『軍艦茉莉』に就ての感想……二六七
北川冬彦君に就て……二七〇
再び北川冬彦君に就て……二七三
詩集『馬糞と星』に就ての田中清一君への希望……二七六
詩人の一態度……二八一
交遊錄……二八四
句集と詩集……二八七
淺野晃氏の敍事詩に就て……二九五
中勘助著『街路樹』……三〇〇

中さんの詩について……三〇二
詩集『進軍』（加藤愛夫著）……三〇八
ぶつくさ……三〇九
中原中也著『在りし日の歌』……三一六
詩集『我れ汝の足を洗はずば』……三一八
室生犀星著『作家の手記』私觀……三一七
高濱虚子著『俳句・俳文・俳話』……三二一
詩集『蛙』に就て……三二三
歌人明石海人……三二六
萩原朔太郎詩集『宿命』……三二三
歌集『天彦』に就て……三二四
燈下言……三五〇
大木實詩集『屋根』……三五三
高森文夫君と杉山平一君……三五七
杉山平一君……三五八
この糧……三六〇

『尾崎喜八詩集』解説……三六二
山本沖子君に就て……三六七
蕪辭……三六八
さとめぐり……三七〇
釋迢空著『近代悲傷集』……三七三
釋迢空著『古代感愛集』……三七四
愚見……三八一
精神の危機……三八六
高村さん……三九八
高村光太郎先生訪問記……四〇〇
高村さんと岩手の國……四一〇
高村さんのこと……四一三
句文集『櫻濃く』……四一六
むかしの詩人……四一九
玉榕青詩集『花蜜園』……四二六
『原民喜詩集』を讀む……四三〇

『堀口大學詩集』解説……四三二
贅言……四三九
贅語……四四〇
詩集『美男』（安西均著）……四四七
中原綾子詩集『灰の詩』……四四八
『闇浮提』（中原綾子著）を讀む……四四九
心の宿……四五二
『酒ほがひ』……四五五
詩集『旅人』を讀む……四五九

口語自由詩と昭和新詩
口語自由詩……四六五
昭和新詩……四八五

解題……五〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

詩に就て

現代俳句の詩的價値

本誌の編輯子が私に命じた一文の課題は、「現代俳句に於ける詩的價値の檢討」といふのである、たいへん嚴めしい題目で、實のところ命に應じておいそれと筆を執るのには、やや躊躇を感じないでもない。だがさう固くなるにも及ぶまい、試みに新作の諸家の吟詠そこばくを拉し來つて、遠慮なしに卒爾の感を述べて見よう、もとより門外漢の門外感だが、或は他山の輕石、諸家が十年錬磨の古胼胝を削りえないものでもあるまい。

幸ひに本誌十二月號には、昭和九年度自選十句と題する項を設けて、現代に錚々たる六十八家の近詠を網羅してある。まづ便宜に從つて一瞥を試みよう。

松瀨青々氏の十句は、何れも可もなく不可もない、どの一句をとつてみても決して拙くはないが、それかといつて、讀者の詩魂を搖り動かす底の閃光を藏してゐるやうでもない。

短夜に佐渡の鶯鳴きにけり
ちぎりきといふ程でなし夏布團

こんなのは、もはや一種の月並といつてもよからう。――こんな風な詩興は、ずゐぶん顔馴染のやうな感じがするのである。

西村白雲郷氏の

土のけて朝顔の芽のあどけなさ

こんなのも甚だしい月並である。往年ホトトギス同人等の排撃した所謂月並調といふのではないが、もはや今日、類似の先例がふんだんに堆積して、人をしてああまたかと思はせるところの、このやうな風趣もまた明らかに一つの月並として排斥されていいだらう。

日のさして木の鶯のしらけ顔
雨あがり苗取りに妻貸しにけり

等はいい。前者は淡如とした一瞬景、後者もまた厭味のない家常卽事の素朴な詩趣を失はない。

人とる時きら〳〵とせし螢かな

これなど、愚にもつかない駄作である。近ごろの俳人諸家は、ともすると、凝つては思案に餘つてか、こんな風な愚作を出して澄ましてゐる、白雲郷氏一人のみではない。

大谷句佛上人の

蟀の蚊帳に來て鳴く野分かな
澄む空に旗はためくや秋の暮

共に月並。だが次の一句はいい、

水の如く涼しき琴の木目かな

琴といふ樂器を中心にした、一つの雰圍氣を詠じ出してゐるところ、正に象徴的といふべきであらう。象徴的だからいいといふのではない、佳句は自ら象徴的な位相を帶びてくるのである。虚子の次の一句の如きも、文字通りの寫生句でありながら、また頗る象徴的な趣致を得てゐる。

人病むやひたと來てなく壁の蟬

名和三幹竹氏の

闕伽棚の小桶に沈む木の實哉

これがやはり月並なのである。月並なると然らざるとの差は、時に毫髮の間にあつて、甚だ說明に困難であるが、——讀者宜しく考ふべし。次の一句の如きもまた月並と云はざるを得ない。

尾花澤清風庵の庭後に祀れる
歌神人麿の像を拜して

瓜茄子人麿供養我もせん

それに較べて、次の一句は、月並といふに近くして實は然らざる佳句である、――確乎とした現實性(レアリテ)が捕捉されてゐるからである。

蟷螂の日々に怒りて老いにけり

白田亞浪氏の

淺間猛る日々を黄ばめり山の麥

は清秀なる佳吟であるが、――日々を黄ばめり山の麥、の黄ばめりといふ動詞の時が、この場合もう一つ腑に落ちかねる、そのために何かしら印象が薄弱となり、一句の張りを損ねてゐる。

朝顔にほそぼそと雨かかりけり

は、從來掲げ來つたものと等しなみの月並句である。一種敬虔な氣持を打出さうとしてゐるのであらうが、平凡。

山本梅史氏の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com